

# 村岡恵理さん

[作家]

2014年上半期に放送されたNHK連続テレビ小説『花子とアン』は『赤毛のアン』の翻訳家、村岡花子さんの半生を描いたものでした。今回は、その孫で『花子とアン』の原案となった『アンのゆりかごー村岡花子の生涯ー』の著者である村岡恵理さんに、本を読むこと、祖母が『赤毛のアン』に込めた思いなどを伺いました。



## 読書する人の姿は美しい

『赤毛のアン』の翻訳者を祖母にもつ私ですが、小学校時代は、アンというよりも、トム・ソーヤーのように活発な子どもでした。

とはいえ、本は大好き。家には児童文学作品がたくさんあり、その中から、表紙やタイトルにひかれたものを手に取って、気の向くままに読んでいました。振り返ってみると、そのころの私は、たくさんの本の中で、自由に「放牧」されていたのだと思います。

子どもを物語の世界に導くには、教師や親などそばにいる大人が本を読む姿を見せるのはもちろん、本についてどれほど愛着をもって語れるかが大切です。

一方的に「これを読みなさい」と指示するのではなく、「私はこの本が大好きなのよ」と常日頃から話すこと。子どもは、そんな大人の姿を心のどこかで覚えているものです。たとえその時は興味をもたなくても、時がくれば、「先生はあのとき、あんなに目を輝かせていたけれど、あの本のどこがおもしろかったのだろう」と、読んでみたくなるはずです。

今、子どもの身のまわりには、読書以外にも、ゲームやSNSなど、刺激的で楽しいことがたくさんあります。それでも、物語が嫌いな子どもはいないと思うのです。

何より、人が本を読んでいる姿は、とても美しいものです。本を手に持って

少しうつむくさまは、背中に羽が生えたようにも見えませんか。

## 心に残る1冊に出会ってほしい

祖母の村岡花子は『赤毛のアン』をはじめ、モンゴメリの作品を数多く翻訳しました。

彼女の作品では、あっと驚く展開が待っていたり、大事件が起こったりすることはありません。そこには、アンの舞台となったカナダのプリンス・エドワード島の風景さながらに、なだらかな丘が延々と続くような、人々の平凡な日常が描かれています。

祖母は激動の時代を生き、「平凡な日常」があつという間に奪われてしまう経験をしてきました。美しい時間の中にいるときはそのことに気づかないけれど、奪われてしまったら、もう二度と元には戻らない。だからこそ、祖母は「人間が求めている究極の幸せとは『普通であること』で、これがなければ、どんな理想も現実もあり得ない」と実感し、『赤毛のアン』を訳し、世に送り出したのだと思います。

今の私たちはあまりにも平和な社会に生き、普通であることの美しさや、その本当の価値をわからないまま生活しています。

『赤毛のアン』には、人間の真理や、人間が生きていくために不可欠なものが描かれています。それがわかるのは大人になってからです。

もちろん、子どものときは物語のおもしろさや登場人物の魅力にひかれて

読み進めばよいと思います。

繰り返していけば、そのうちきっと、何度も読み返したくなる本に出会えるはずですよ。

## すぐに結果を求めない

子どものころに読んだ物語を大人になって再読すると、当時とは違った印象をもつことがあります。このように、自分の成長によって、物語のとらえ方が変わっていくのも、読書の魅力のひとつと言えます。

同じように、先生の厳しさや教える尊さも後で気づくものです。

私も祖母と同じく東洋英和女学院で学びましたが、歴史ある学校だけあって、中には、非常に古風な物腰の先生がいらっしゃいました。当時は、先生の時代錯誤的な言葉をわざとまねたりすることもありましたが、今になると、よくぞあれほどきれいな言葉で接して下さったなと、その教える、とても尊く感じています。

教育とは、目に見えない魂に彫刻していくような仕事。見えないぶん、成果が出るまで時間がかかります。

すぐに結果を求めて子どもに媚びるのが一番良くないと思う。それよりも、怖くても厳しくてもいいから、一人の人間として「これは曲げられない」という芯をもって子どもに接してほしいです。

そんな先生の姿こそが、子どもの心に忘れがたい印象を残していくのだと思います。

## PROFILE

むらおかえり●1967年、東京都生まれ。成城大学文芸学部卒業。姉の翻訳家・村岡美枝とともに祖母・村岡花子の書庫を「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として保存、著作物や蔵書の研究を行う。また『赤毛のアン』の作者・L.M.モンゴメリの子孫やプリンス・エドワード島州政府との交流を続けている。『アンのゆりかごー村岡花子の生涯ー』（新潮文庫）、『村岡花子の世界：赤毛のアンとともに生きて』（河出書房新社）など、村岡花子に関する著書を多数手がける。

教育は、魂に彫刻していくような仕事  
だからこそやりがいがある